

谷崎町臣印全集

第二十一卷



谷崎潤一郎全集 第二十一卷

定價一五〇〇圓

昭和四十三年七月十一日印刷
昭和四十三年七月二十五日發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 山越 豐

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二十一
電話(五六一)五九二一
振替東京三四

目次

東京をおもふ	一
春琴抄後語	七
文章讀本	七
私の貧乏物語	二四
大阪の藝人	二六
半袖ものがたり	二七
廁のいろく	二八
旅のいろく	二九
源氏物語の現代語譯について	三三
所謂痴呆の藝術について	三九

客ぎらひ

三五九

雪

三七二

早春雜記

三九一

メモランダム

四〇一

ラヂオ漫談

四二一

春團治のことその他

四二九

老いのくりこと

四三七

創作餘談

四四三

明治回顧

四五二

氣になること

四六一

文壇昔ばなし

四八一

或る日の問答

四九七

にくまれ口

五二一

東京をおもふ

昭和九年一月號—四月號「中央公論」



想ひ起す、大正十二年九月一日のことであつた、私は同日の朝箱根の蘆の湖畔のホテルからバスで小涌谷こわまだにに向ふ途中、蘆の湯を過ぎて程なくあの地震に遭つたのであるが、そこから徒歩で崖崩れのした山路を小涌谷の方へ降りながら、先づ第一に考へたのは横濱にある妻子共の安否であつた。私は家族と八月の初旬から小涌谷ホテルに暑を避けてゐたが、一日から娘の學校が始まるので、二十九日の晩に妻と娘とを送つて一旦横濱へ歸り、自分だけ又戻つて來て三十一日の夜から蘆の湖畔へ遊びに行つてゐたのである。私は大の地震嫌ひで、天明や安政の大地震の話や地震學者の説などをかね／＼注意して聞きも讀みもしてゐたので、今、自分がかうして山路を辿りつゝある最中、横濱では大火災が起つてゐるに違ひないと思つた。自分の家は決して潰れないと云ふ信念があつたが、しかし渦まく焰の中をかよひ者共はどうして逃げ終せることが出來よう。いや、それよりも、瞬時の猶豫なく立ち退いて市中を突破しなければ、忽ち八方から火に包まれることを彼等は知つてゐるだらうか。なまじ家が潰れないので、まあ助かつたと、ほつとしてゐるのではないであらうか。自分がゐたらそんな油斷はさせないが、恐らくそこまでの分別はあるまい。私の眼には、右往左往に逃げまどふ群集に交つて、火に追はれつゝ彼方へ走り此方へ走りする彼等が見えた。やう／＼一方の活路を見出だして行くと、其方にも火の手が揚がつてゐる、又引き返して外の路を行

くと、其方にも火の手が揚がつてゐる、次第に絶望し、氣力を失ひ、折角助かつたと思つた喜びがあきらかに變つて、父の名を呼び夫の名を呼びつゝ行き倒れる。私の頭には、想像し得られる最も傷ましい可憐な彼等の姿が浮かんだ。今、私を呼び續けつゝだん／＼細くなつて行く哀しい聲が聞える氣がした。私は幾たびか横濱の方と思はれる空を望んだ。が、それでも萬一と云ふ希望が持てたのは、東京よりも横濱の方が町が小さいだけに、市中を抜け出ることも容易である、私の家は樹木の多い山手の居留地にあつて、市の中心から離れてゐるので、海の方へ逃げれば駄目だが、もしひよつとして、運よく反對の方へ逃げ出したら、或ひは早く郊外の廣い所へ出られるかも知れぬ。それも、現に今その方へ走りつゝあるのでなければ遅い。私は彼等の脚の速力と郊外までの距離とを測つた。最短距離、最長距離、最も火災を起し易い途中の建物、崖崩れのありさうな路、「あ、そつちへ行つてはいけない、此方だ／＼」と、私は心の中で叫んだ。私は又、首尾よく彼等が助かつたとして、再び彼等に遇へるのは幾日後であらうかと思ひ、「早く一箇月の後」でなければならぬと算定した。なぜなら私は災害の程度を非常に大きく考へて、東京横濱は殆んど灰燼に歸してしまひ、二つの大都會の人口の過半は失はれて、あらゆる社會機構、交通も秩序も滅茶々々になつてしまふであらうと考へたのである。後になつてみると此の想像は少し大袈裟過ぎたけれども、私には今の地震が、古來六七十年目毎に關東を襲ふ週期的大地震の一つであつて、それが内々恐れられてゐた通り、ちやうど廻つて來たものであると思へた。さうだとすれば、今の東京の人家と人口の稠密さは、安政度の江戸の比ではない。建物も洋風の建築が殖えて、而もそれらが外觀は立派だけれども、古いものは地震に何よりも脆いと云はれる煉瓦造り、新しいものは木ずりの上へ壁を塗つた、博覽會

の建物のやうな、火事には恰好な燃料である張りぼてが多い。その上に昔はなかつた瓦斯^{ガス}の電氣だの石油だのその他いろ／＼の爆發物があり、それらを大量に使用し又は貯藏する工場や倉庫がある。とすると、人命の損失と、家屋の倒壊焼亡の數は想像に絶するものがあらう。安政の災害は本所深川が最も激しく、他はそれ程でなかつたと云ふが、今度は恐らく下町全體がやられるであらう。倒壊を免れた家屋はあつても、火が諸方から起り、且火の廻りが早いとしたら、山の手とても無事ではあるまいし、日本橋、京橋、下谷、淺草、神田邊の住民は、悉く逃げ場を失つて焼け死ぬであらう。東京がさうだとすれば、よし助かつたとしても家族共は何處へ頼つて行くか。妻と、娘と、妻の老母と、兄弟たちとが、逃げる間に散り散りにならないものでもないし、彼等が互ひにめぐり會つて一箇所へ集まるのは果たして幾日先のことか。私は自分の親戚を見渡して、たつた一軒、上州の前橋にゐる妻の兄だけが息災であらうと考へられたので、そこから焼け野原の東京や横濱へ人を出してくれ、雲を掴むやうな搜索をすることになるのではないかと思つたりしたが、一箇月後と云ふ算定はさう云ふ想像に基いたのであつた。

○

私が遭難した場所は小涌谷の半里程手前であつて、そこから小涌谷へ歩いて行く途々、私の腦裡には以上のやうな憂慮とも妄想ともつかぬものが、しきりなしに去來したのである。しかし私は、さう云ふ悲しいことばかりを思ひ詰めてゐた譯ではない。時間にしたら三十分か一時間ほどの間だけでも、その間には妻子共の傷ましい姿に交つて、それとは全く違つた種類の幻影が、とき／＼眼の前を掠めたのであつた。

斷つておくが、大正十二年と云ふと私は三十八歳である。そして横濱に住んでゐたと云ふのは、大正活映のプロダクションに關係してゐたためでもあるが、實は東京と云ふ所が嫌ひになつてゐたからでもあつた。私はファイルムの仕事に携はる前、大正六年頃から始終伊香保や鶴沼^{くづねま}へ轉地して、東京の家に居着かなくなつたのであるが、大正八年の十二月に本郷曙町の家を疊んで小田原の十字町へ移り、十年に横濱へ越して來たのである。だが、いかに東京蟲眞の人でも、あの時分、世界大戰當時から直後に及ぶ好景氣時代の帝都を、立派な「大都會」だと思つた者はないであらう。その頃の新聞紙は筆を揃へて「我が東京市」の交通の亂脈と道路の不完全とを攻撃したものであつた。たしかアドヴァタイザー紙であつたかゞ社説で東京市の不體裁を散々にコキおろして、日本の政治家は社會政策だの勞働問題だのと大きなことばかり云つてゐるが、政治と云ふのはそんなものではない、先づ此の首府の泥濘を始末して、雨が降つても無事に自動車を通せる道路を作ることだと云つてゐたのは、しみじみ同感したゞけに今も覺えてゐるのである。「東京は都會ではない、大きな村だ、或ひは村の集合だ」と云ふ惡罵は、日本人も外人も口にした。當時二重橋外の廣場は夜更けてから自動車の往來が頻繁なために道路の破損することが最も甚しく、乗客は凄じい動搖を感じたので、彼處は玄海灘だと云はれた。私は淺草橋から雷門へ行く間で、クシヨンから激しく跳ね上げられ、箱の天井でいやと云ふ程鼻柱を打つた覺えが二度ばかりある。氣がついてみると、自動車の箱の天井は柔かい布が張つてあるが、ちやうど眞ん中あたりのところに固い棒が這入つてゐて、跳ね上げられると、そいつが鼻へ打つかるやうな位置にある。こいつは危険だ、たび／＼こんな目に遭ふと今に鼻血を出すやうなことになると思つたが、鼻血どころではない、とう／＼そのために死んだ人があると云ふ

噂さへ聞いた。それなら電車はどうかと云ふのに、これが又死に物狂ひであつた。今から考へると、かう云ふ亂脈にも一面無理のない事情があるので、何しろ財界の活況につれて諸種の事業が俄かに勃興し、地方の人間が皆都會へ集まつて来る。東京市は此の慌しい人口の増加と郊外地帯の膨脹に對して、急に應ずる暇がない。道路を舗装するとか、アパートを建てるとか、そんな施設をする間もなく、どん／＼自動車が入入られ、場末の方には木ツ葉のやうな安普請の借家が殖える。そのくせ高い家賃を出しても、中々家が見つからない。庶民階級の交通機關は路面電車だけしかないので、来る電車も来る電車も満員で、長い間停留場に立ちん坊をさせられる。ラッシュアワーには全く殺人的な騒ぎで、夕方、腹を減らしてイラ／＼しながら、歸路を急ぐ會社員や労働者などが、車掌の制するのも聽かばこそ、もう鈴なりになつてゐる車臺へ我れ勝ちに割り込まうとする。その争ひのために尙混雜して、中の者は出ることが出來ず、外の者は乗ることが出來ない。そして乗り損なつた者は蒼白な顔で恨めしさうに電車の影を見送つてゐる。さう云ふ人々の物凄いい眼を見ると、私はしば／＼慄然とした。いつも乗れるのは一人か二人で、大部分は置いてき堀を食ふのであるから、市電に對する怨嗟の聲は巷に充ち充ちてゐた。留まつた電車の昇降口に群集が黒山のやうにたかつて、押し合ひ、へし合ひ、罵り合ふ騷擾が、いかに人心を險惡にさせてゐるかは、誰しも私かに憂へたところで、それを放置してゐる爲政者の氣が知れなかつた。彼等の狼のやうに尖つた、怒りに燃えた顔つきを見ては、怨嗟の聲がいつ何時もつと上層の階級へ向けられるかも知れない、日本人だから辛抱してゐるが、歐米の都會で市民を斯かる状態に置いたら一日で暴動が爆發すると説く人もあつた。その外電話なども電車と同じやうな有様で、これが又店員や事務員の神經を苛立たせた。亞米利加^{アメリカ}あ

たりでは電話會社へ申し込むと五分も経てば取り附けに來ると云ふのに、日本では埒が開かないから高い金を出して電話屋から買ふのだが、それも好景氣で途方もない値を呼んでゐる。そしてやう／＼取り附けた迄はいゝが、電話の數に比例して交換手の手が足りないのか、交換局を呼び出すへが容易でない。出ても直ぐに引つ込んだり、番號を聞き違へたり、混線などが始終である。やつと繋いでくれたかと思ふと、話中をボン／＼切られる。腹が立つて又交換手を呼び出すと今度はあべこべに「お話中」を食はされる。毎日電話口で交換手と喧嘩したり、ベルをガリ／＼と焼け糞に鳴らしたりすることが珍しくない。怒鳴られる交換手の役も大抵ではないであらうが、急用を控へた店員たちのイキリ立つのも尤もで、私が未だに電話嫌ひであるのも、電話は人を神經衰弱にさせるものと云ふあの時以來の觀念が抜けないからである。市内でもそんなであるから、横濱から東京を呼び出すのには半日もかかり、往つて復つて來た方が早いからゐ、いや、ほんたうに早かつたのであつた。それから瓦斯もいけなかつた。私の本郷の家では、壓力が足りなかつたり、空氣が交つて消えてしまつたりして、臺所の者がぶつ／＼云つた。今日でこそ日本の雜貨は世界を席捲してゐるが、あの時分は我が國の工業が先進國の幼稚な模倣ばかりをしてゐる試練時代にあつたのであらう、凡そ國產品と名のつくものに碌なものはないやうな氣がした。私はたび／＼マツチで腹を立てたことがあつた。と云ふのは、大概なマツチは擦るとシュツと燃えたきり、棒の先で消えてしまふ。一本の煙草に火をつけるのに四本も五本も擦らなければならぬ。懷中電燈などもさうであつた。電池と電球との接觸が不親切に出來てゐるので、買ふともうその歸路でスキツチが利かなくなる。當時日本活動寫眞では尾上松之助が大持てゝあつたが、あれが我が國の文化の程度を象徵してゐたと云つてい

い。舊き日本が捨てられて、まだ新しき日本が來たらず、その執方よりも悪いケーオスの状態にある、さうしてそれが、亂脈を極めた東京市のあらゆる方面に歴然と現はれてゐたのであつた。

○

さう云ふ感を催したのは私ばかりではなかつたであらう。全く、あの松之助の寫眞を見ては、日本人の劇、日本人の顔が悉く醜惡なものに思はれ、あれを面白がつて見物する日本人の頭腦や趣味が疑はれて、日本人でありながら日本と云ふ國がイヤになつた。あの頃の私は、帝國館やオデオン座あたりへ行つて西洋映畫を見るより外に楽しみはなかつたものであるが、松之助の映畫と西洋のそれとの相違は、即ち日本と歐米との相違であると思へなかつた。私は西洋映畫に現はれる完備した都市の有様を見ると、ますます東京が嫌ひになり、東洋の邊陲^{へんすい}に生を享けた自分の不幸を悲しみもした。もしあの時分に金があり、妻子の束縛がなかつたならば、多分私は西洋へ飛んで行つて、西洋人の生活に同化し、彼等を題材に小説を書いて、一年でも多く向うに留まつてゐたであらう。大正七年に私が支那に遊んだのは此の滿たされぬ異國趣味を纔かに慰めるためであつたが、旅行の結果は私を一層東京嫌ひにし、日本嫌ひにした。なぜなら、支那には前清時代の倂を傳へた、平和な、閑靜な都會や田園と、映畫で見る西洋のそれに劣らない上海や天津のやうな近代都市と、新舊兩様の文明が肩を並べて存在してゐた。過渡期の日本はその一つを失つて、他の一つを得ようともがいてゐる時代であつたが、自分の國の中に租借地と云ふ「外國」を有する支那に於いては、此の二つが相犯すことなく兩立してゐた。私は北京や南京の古い物寂びた町々を見、江蘇、浙

江、江西あたりの、秋とは云ひながら春のやうに麗らかな、のんびりした田舎を歩いて、多分に浪漫的空想を刺戟され、地上に斯くの如きお伽噺の國もあつたのかと云ふ感を抱いたが、天津や上海の整然たる街衢、清潔なベージュメント、美しい洋館の家並みを眼にしては、歐羅巴の地を踏んでゐるやうな嬉しさを味はつた。就中上海は當時の東京や大阪よりもいろ／＼の施設が遙かに進んでゐて、もうその頃から四つ辻には交通巡査が立つてゐたし、近頃やう／＼京都に出来た無軌道電車なども走つてゐたし、新たに擴張されつゝあつた郊外の方には、コンクリートの自動車道に並んで、馬の蹄を損ねないやうに柔かい土を盛つた馬車道までが作られてゐた。で、旅行から歸つて來た私は、日本を厭はしく思ふと共に、熱心な支那好きになり、更に熱心な西洋好きになつた。従つて、私の取り扱ふ題材は西洋を慕ふ心持ちのものが多く、私の生活様式は、衣も、食も、住も、ひたすら西洋人の眞似をして、及ばざらんことを恐れるやうになつて行つたが、さう云ふ私に東京が面白い筈はない。その頃の東京には洋館の借家などはめつたになかつたし、たまにあつても貴族や高官の住むやうな大きな屋敷ばかりである。よんどころなく貧弱な西洋家具を買つて來て、日本間に飾つてみる。衣服は裁縫の上手な洋服屋を搜して、これも西洋の映畫で仕込まれた智識に依つてモーニングからタキシードまで一通り揃へ、ネクタイの蒐集までして、先づ外見はハイカラな紳士が出來上がるが、その恰好で何處へ押し出すと云ふアテもない。帝劇にバンドマンのオペラがかゝつたり、精養軒ホテルで結婚の披露があつたりする時の外は、タキシードを着る機會もなく、折角の服も持ち腐れになる始末であつたが、それでもモーニングや背廣を着込んで、ステッキを振り振り銀座や淺草をそゞろ歩く。さう云ふ時に私の腦裡には、カジノやキャバレやダンスホールなどが浮かぶのであるが、

そんなものが此の都會にはないのだと思ふと、「あゝ、東京は詰らないなあ」と、常にも増して感ずるのである。私は上海のカルトンカフェーで夜會服を着た白人の男女が幾組も踊つてゐる花やかな光景を見て來たが、私が行つた時、そのカフェーに日本人のマネエヂヤーがゐて、「將來これを東京へ持つて行かうと思ふんですがね」と、語つたことがあつた。しかし私は、その計畫には大賛成だけれども、此の日本人は日本と云ふ國の事情を知らない、かう云ふものを東京へ持つて行つて警察が許す筈がないと思つたので、「それはとても駄目でせうね」と答へておいたが、さう云ふ日本の國情を考へると、いよゝゝ淋しくなるのであつた。私は既に藝者と云ふものに反感をさへ持つてゐたので、どんなに異性の友達に憧れても、茶屋や待合には足が向かない。私の求めるものは、生き生きした眼と、快活な表情と明朗な音聲と、健康で均齊の取れた體格と、さうして何よりも、眞つ直ぐな長い脚と、ハイヒールの脊がびつちり箆まる爪先の尖つた可愛い足と、要するに、外國のスタアの肉體と服裝とを備へたやうな婦人であつた。私はそれに似たものを見るためにしばゝ金龍館や日本館や觀音劇場のオペラへ行つた。そしてあの頃の原信子や、岡村文子や、まだ十四五の小娘であつた可憐な石井小浪嬢の舞臺姿を眺めて、幾分か渴を癒やしてゐた。事實、大正八九年頃の日本ムスメたちは、女學生さへが海老茶の袴を穿いてゐたので、舞臺の上より外に洋裝の女を見ることは稀であつた。私の記憶に誤まりがなければ、鶴見の花月園に横濱の外人を當て込んだダンスホールが許されたのは、たしかに大正十一年頃で、彼處へぼつゝ西洋婦人に見紛ふやうな服裝をした日本の女が來るやうになつたが、それも大概是横濱に住んで西洋人と付き合つてゐる人々であつた。その後東京にも新築の帝國ホテルなどに時々ダンスの催しがあり、二三の小さなホールも出來たが、何分

世間一般が社交ダンスと云ふものを白眼視してゐた時代なので、到底横濱のやうな譯には行かず、顔觸れも殆んど横濱の連中が押しかけて行くに過ぎなかつた。が、兎に角少しづつでもさう云ふ機運が向いて来たからには、やがて東京の空にも紐育ニイギョクにあるやうな摩天樓が聳え立ち、町に行く女は皆すつきりした洋装をしてコンクリートの舗道を杳の踵かかとで憂々ゆう々と歩み、あらゆる西洋の娛樂機關が輸入されて、カルトンカフェーのマネエヂャーの夢みたことが實現するやうになるであらう。何事も西洋を模範とする日本である以上、必ずその時代が來ずにはゐない。私はさう思ふと、その想像で胸が高鳴るのであつたが、翻つて自分の年齢を考へ、現在のだらしない東京市を見ると、此の雜然たる首府の面目が一新するのはいつの日であらうかと云ふ歎聲が湧き、その間に自分の青春の去つてしまふのが口惜しかつた。自分は東京生れだけれども、今の東京には何の未練もない。いつそ大火事でもあつて、あの五味溜めを引つくり覆へたやうな町々が烏有に歸してしまつたらいい。さうしたら遅々として捗らない改良工事が、一舉にして成就するだらう。私は明け暮れそんなことばかり考へてゐた。

○

ラフカディオ・ハーンは、人は悲しみの絶頂にある時に見たり聞いたりしたことを生涯忘れないものだと言つた。だが私は又、人はどんなに悲しい時でもそれと全く反對な嬉しいことや、明るいことや、滑稽なことを考へるものであるやうに感じる。なぜなら私は、かの大震災の折、自分が助かつたと思つた刹那横濱にある妻子の安否を氣遣つたけれども、殆んど同じ瞬間に「しめた、これで東京がよくなるぞ」と云ふ